

大楽寺（富山県新湊市）の建築

吉 田 純 一*

The Historic Architectures of Dairakuji-Temple in Shinminato-City, Toyama Prefecture

Jun-ichi Yoshida

The Dairakuji-Temple in Sinminato-City, Toyama Pref. has four historic architectures, Hondo (main hall), Kuri (priest quarters), Sanmon (main gate) and Syoro (bell tower). These buildings were built from the second year to the sixteenth year of Meiji period (1869 ~1883). In particular, we pay attention to why the Hondo has the appearance of the storehouse style without taking the tradisional style of the Buddhist architecture. The main hall which has the storehouse style is existed scarcely in Japan now.

1. はじめに

長恩山大楽寺は富山県新湊市立町に所在する浄土宗の古刹である。花山天皇の勅願によって長徳2年(996)に創建された長徳寺(天台宗)が前身で、弘安元年(1278)に大楽寺の寺号を賜わり、宗派も天台から浄土宗に改めたと伝わる⁽¹⁾。その後、天正年間(1573~92)に北陸観音霊場三十三箇所の第二十番札所になり、近世に入ると、歴代の富山城主から厚い帰依を受けていた。幕末には東照宮が勧進され、嘉永元年(1848)には当寺出身で、第24世の勅許禅誉上人を師とした大僧正萬譽顯道上人が浄土宗の総本山知恩院の第71世法主になっている。大楽寺は仏像・仏画・墨跡などの寺宝も数多く所蔵しており、平成6年に高岡市立博物館で、特別展「大楽寺の文化財」が開催されている⁽²⁾。

大楽寺に現存する歴史的建造物は、本堂と庫裏(土蔵を含む)、山門、鐘楼の4棟である。このうち、特に本堂は全国的にも希な土蔵造であり、平成9年8月に国の登録文化財に指定された。また本堂を含めた4棟の建物は、すべて明治初~中期の建築で、破損、不朽はほとんどみられず、創建当時の寺観をよく今に伝えている。

本稿は、平成8年12月に実施した本堂などの建築調査をもとに、大楽寺の歴史的建築の形式や特徴、意義などについて報告している。

2. 大楽寺の寺地と建物の変遷

大楽寺の前身といわれる長徳寺は、七堂伽藍を構える大寺院で、現在の新湊高校付近(西新湊)にあったと伝わる⁽³⁾。大楽寺の寺号を賜った後の長享年間(1487~89)に上杉謙信の兵火で焼失したため、海辺の濱町に新たに寺地を得、但阿無外上人によって再興された⁽⁴⁾。ところが、この地は海際のために荒波で浸蝕されたり、波浪の被害を受けることが多かったという。

江戸時代に入ると、大楽寺の寺地や建物の様相はやや具体的になる。当寺に所蔵されている延宝3

* 建築学専攻

年の図(図-1)の注記によると、延宝元年(1673)に賛譽上人が濱町の替地を願い出、翌2年に山王町に新たな寺地を認められた⁽⁵⁾。この図によれば、山王町に得た寺地は、東西32間余、南北20間余で、北側に長さ5間余、幅2間の張り出しがあり、広さは640坪余であった。周囲は東側と南側、西側が田畠で、東北隅と西北隅に「小川在」とある。そして境内のほぼ中央に、本堂と庫裏が前後に少しずれて東西に連なっていた。この本堂は移転の翌年(延宝3年)に建立されている⁽⁶⁾。図にはこの本堂と庫裏以外に他の建物は記されていない。

延宝の図から約124年後の寛政11年(1799)の図(図-2)をみると、寺地の大きさは、東西方向が南辺22間余、北辺20間余、南北方向が22~23間余で、広さは554坪余である⁽⁷⁾。延宝の図より東西方向が10間ほど短く、南北方向は逆に2~3間長く、広さは90坪余小さくなっている。しかし、北側に長さ4~5間の突出部があること、東辺から北辺、西辺中程を巡る「堀」は、延宝の図の小川との関連がうかがえることなどから、延宝~寛政の間に寺地の新たな移転はなく、寛政の図に示された寺地は延宝期のものを引き継いでいるとみてよい。本堂と庫裏が境内のほぼ中央にあって、東西につながっている形態も延宝期と同じである。しかし、本堂、庫裏ともに規模は延宝の図よりも小さく描かれている⁽⁸⁾。この他、北辺の突出部の付け根に「門」があり、境内の東側に「観音堂」と「地藏」、西側に「土蔵」と「ナヤ」がある。これらの小規模な付属的建物は、延宝の図にはみられなかったもので、それ以降、寛政の間に整えられたと考えられる。寺地の北半の周囲に巡る「堀」もこの間に新たに整備されたのであろう。

寛政の図からさらに90年余後の明治11年(1878)の図(図-3)も残されている。この図は明治2年の焼失後の再建に関わる図とみられている。図に示された本堂や庫裏、山門、鐘楼などは後述するように、現存のものとはほぼ同じであり、これらの建物はこの図に近い状態で再建されたとみてよい。寺地の広さは676坪余⁽⁹⁾で、寛政の図より120坪ほど大きくなっている。しかし、北側の突出部の状態や東辺から北辺、西辺を巡る堀の様子は、寛政の図とはほぼ同じであり、寛政~明治の間にも寺地の移転はなかったと考えられる。本堂と庫裏の位置関係もやはり延宝や寛政の図にみられるものと同じである。

この時再建された本堂は、瓦葺で、土蔵造であった。建坪は79.5坪である。また、庫裏は二階建てで、建坪が120.4坪である。注記によると、ほかに総門(1.1坪)、鐘楼堂(1.7坪)、秋葉尊堂(2.8坪)、物置(8.85坪)、土蔵(7.5坪)、戸前(5.5坪)、廊下(12.3坪)などがある⁽¹⁰⁾。総門は現在の山門、鐘楼堂は同じく現鐘楼に比定でき、土蔵と戸前も庫裏の北側にみられ、廊下は本堂と庫裏をつなぐ廊下とみられる。秋葉尊堂と物置は現存せず、北半の堀も現在はみられない。

以上のように、大楽寺の寺地は、大きさや広さは時代によって多少違い、地名も山王町(延)から紺谷町(船)そして現在の立町へ変わっている。しかし、寺地は延宝2年に山王町へ移転してからは現在まで、一貫して変わらずに引き継がれていること、本堂と庫裏はたびたび再建されたが、東西に連なる位置関係は常に踏襲されていたこと、延宝以降に北半の周囲に堀が巡らされ、門などの付属建物がつくられ、寺観が整備されたこと、明治2年の火災後に再建された建物の多くが現存していることなどを指摘できる。

3. 建物の形式と特徴

大楽寺に現存する本堂、庫裏、山門、鐘樓の各建物は、いずれも明治2年(1869)9月2日に山王町から発生した火災後に再建されたものである。以下に各建物ごとに構造形式や平面、特徴などについて触れる。

(1) 本堂

本堂は桁行7間、梁間11間、切妻造、棧瓦葺、平入りの建築で、正面に3間幅の向拝がつく。外壁、軒回り、妻部などの外回りをすべて土壁で塗籠めた土蔵造である。ただし、妻面は現在、表面に金属板を張っている。

本堂の棟札(驥-7)によると、明治11年4月8日に新初があり、同年8月8日から18日に柱立、そして翌12年1月15日に入仏供養が行われている⁽¹¹⁾。造営の世話人檀頭の藤井能三は、伏木の近代化に尽力した豪商である⁽¹²⁾。藤井家は大楽寺の壇家であり、当家の墓は今も大楽寺にある。彼は本堂の再建に際して、自分の持山から松の大材36本を寄贈している⁽¹³⁾。藤井以外の7名の世話人もそれぞれ当寺に関わる有力者とみられ、旅家権七は宮殿鏡板を、木林五(郎)右衛門は大前卓や虹梁・柱などをそれぞれ寄贈している⁽¹⁴⁾。また、大工頭(鰻)梁は三日曾根村の長田傳右衛門で、彼の下に奈良仁兵衛など7人の大工がかかわっていた。

ただし、正面につく向拝は本堂より10年ほど遅れて、明治22年7月につくられたことが向拝の棟札からわかる⁽¹⁵⁾(驥-8)。明治11年の図の向拝は幅2間半であるが、現状は3間あり、この時に2間半から3間に改められたと考えられる。向拝柱は漆喰塗、木鼻の獅子頭は漆喰彫刻で(驥-2)、組物は連三ツ斗である。世話人5名のうち、紺谷藤治郎、摺治(曲)六三郎、真ノ(野)徳八郎らは本堂の再建の世話人でもあった。また、大工頭(鰻)梁は三日曾根村の松田傳右衛門とあるが、本堂を手掛けた長田傳右衛門の誤りかも知れない⁽¹⁶⁾。この棟札には壁職の斎藤四良右衛門、中野久平(前町)、蔵田佐七(今井)、林外治良(訃)の名前もみられる。

大楽寺本堂の外観は土蔵造であって、伝統的な本堂建築の形態とかけ離れている。しかし、内部の平面構成は伝統的な浄土宗本堂の形式を踏襲している。向拝を入ると、1間半幅の入側があり、その奥はたて3列に区分けされる。建具は入側境にたつだけで、外陣と内陣回りは開放的である。中央列は3間幅で、前方が方3間、18畳敷の外陣である。内法上は両側面と前方入側境に欄間が入り、内陣境は虹梁に簷股がつく。天井は格天井である。後方の3間半が内陣で、この周りだけ丸柱を用いている。内陣は畳を追い回しに敷き、外陣境と両側面は朱の結界を巡らしている。天井は折上格天井である。外陣と内陣の左右両脇はともに幅2間、奥行6間半の深奥い部屋で、背後の境はやはり朱の結界で閉ざされている。天井はともに棹縁天井である。

そして背後の梁行3間は、前方1間が板敷で、奥2間はいわば奥仏壇で、当寺の秘仏である聖観世音菩薩立像や阿弥陀如来立像(平野氏、鎌倉院文庫)をはじめ多くの仏像が安置されている。

3列構成の開放的な平面や奥に長い平面構成は、浄土宗本堂の特徴である。大本山地恩院の勢至堂もやはり奥に長い3列構成の平面をもつが、勢至堂の奥行きは7間であり、背後に仏像を安置する空間はみられない⁽¹⁷⁾。したがって、大楽寺本堂は勢至堂よりもさらに奥深い平面をもっている。こうした平面構成は、明治11年の図とほとんど変わりなく、現状はほぼ創建当時の状態をそのまま留めている。

ところで、土蔵造の本堂の現存例は少なく、重文指定のものは新潟県村上市の浄念寺本堂(文化15年)だけで、未指定のものでも東京湯島の講安寺本堂が上げられるのみである⁽¹⁸⁾。近代化遺産の全国調査が進むにつれて、今後いくつかの類例が発見される可能性もあるが、大楽寺本堂はきわめて希な土蔵造本堂の現存例として貴重である。なお、正面の向拝入口と東側の4箇所の開口部には片引きの金属板張りの雨戸(歇戸)とステンドグラスの格子戸がたつ。格子戸は近年取り替えられたが、ステンドグラスは以前から使われていたという⁽¹⁹⁾。

(2) 庫裏(土蔵を含む)

庫裏は桁行17.51m、梁行29.52mで、南西隅に4.35m×5.74mの張出部がある。切妻造、棧瓦葺、一部二階建ての建物で、土間の北端に土蔵が続く。土蔵は桁行2間半、梁間3間、一重二階建て、切妻造、棧瓦葺で、前面の下屋を「とのまえ(前)」としている。庫裏や土蔵は明治2年の火災焼失後、ただちに再建されたと伝わり、先掲の本堂棟札の裏書からも裏付けられる⁽²⁰⁾。

庫裏は本堂の西にあり、前後二本の渡廊下でつながる。南半の床上部分は桁行8間半、梁間8間半余で、10室からなっている。

本堂寄りの東端に式台(12畳)と24畳半の大広間がある。式台は大広間への正式な入口となる部屋である。大広間は奥行き5間の大きな部屋であるが、中程の柱には鴨居の仕口痕跡があり、もとは前後2室に分かれていた。このことは明治11年の図でも確認できる。大広間の右隣に続く14畳半の広間と8畳間はともに内法長押を回し、天井は棹縁天井である。さらにその右隣に上の間(9畳)と内仏の間(8畳)がある。この2室は先の4室と比べると、木割が小さく、数寄屋風の座敷で、内向きの性格がうかがえる。

一方、式台の右隣は玄関の上がり口にあたる部屋で、イロリがあり、周囲は帯戸を建て、内法高に1尺を越す差物を回す。天井はなく、吹き抜けで、上方にキの字型の梁組をみせる。当地域の民家の「おいえ」あるいは「おえ(おい)」にみられる室内構成である。最も西寄りの列の各部屋は改造されているが、明治11年の図と基本的な構成は当初のままと考えられる。

この床上部の北に、表側に玄関、奥に台所が続く。屋根はこれらの部分の北端まで葺き下ろされている。しかし、台所の上には二階があるために、同じ切妻屋根でも台所側の方が玄関側より棟が一段高くなっている。そして台所の北側に桁行2間半、梁間3間、切妻造、棧瓦葺の土蔵がある。その前方、台所側に下屋を取り付け、板敷の「とのまえ」がある。土蔵と「とのまえ」も明治11年の図にみられ、庫裏と同じところにつくられたと考えられる。

現在の庫裏は明治2年9月2日の火災後につくられ、当初は仮本堂としても使われていたと伝わり、東寄りの式台と奥に続く大広間はその名残を留めているものと思われる。しかし、玄関の上がり口の部屋はいわゆる民家の「おいえ」の室内構成をもっている。この建物は本堂と庫裏の性格を合わせもっていたために大規模になったのであろう。

現在の庫裏は明治11年の図と比べると、先述したように西端の部屋列や北寄りの台所部分などにやや改変の跡がうかがえるが、全体的にみて基本的な構成は変わっていない。庫裏も本堂と同じように明治期の創建時の状態をほぼそのまま今に伝えているとみてよい。

(3) 山門

大楽寺の正門で、北辺の参道を入った正面にある。棧瓦葺の薬医門で、西側に2間、東側に3間の

袖塀が続き、西側の門脇1間に片引きの潜戸がつく。主柱間はほぼ1間半(2.65m)で、主柱と控柱間は約5尺(1.45m)である。

明治11年の図にみられる「総門 一坪一合 一棟」が、現山門に相当すると考えられる。先掲の本堂の棟札に、「其年(明治16年)ニ祖聖光上人六百五十回御忌大會ヲ營畢」とある⁽²¹⁾ことから、明治16年の聖光上人の六百五十回忌の法要までに、総門すなわち現山門ができていたと考えられる。

(4) 鐘楼

鐘楼は境内の東側の北寄りにあり、高さ約2尺ほどの石積みの基壇上にたっている。桁行、梁間ともに1間(2.49m)で、切妻造、棧瓦葺の建物である。腰、内法、頭の三段に貫を通し、柱天に台輪を回して出三ツ斗の組物を受けている。妻側の中備は簷股で、上の虹梁を受け、さらに簷股を置いて棟木を支持している。

本堂の棟札に「明治第十六年三月十日梵鐘助力ニ而新出来」とあり⁽²²⁾、鐘楼は梵鐘が出来した明治16年3月10日より前に完成していたと考えられる。

4. おわりに

大楽寺の本堂と庫裏（含む土蔵）、山門、鐘楼は、いずれも明治2年9月の火災後から明治16年にかけて相次いで再建されたものである。中でも本堂は明治11～12年の建築で、外回りを土壁、漆喰で塗籠めた土蔵造で、全国的にも類例が少ない、貴重な本堂建築である。こうした外観とは裏腹に、内部は浄土宗本堂の伝統的な形式を踏襲していて、奥に長い3列構成の、開放的な平面をもっている。

また、大楽寺本堂が明治の再建に際して土蔵造を採用した要因のひとつに、防火対策があったことは間違いないであろう。土蔵造が富山県の防火、防災建築の基準指針として取り入れられたのは、明治33年6月の高岡大火災後である⁽²³⁾から、大楽寺本堂はそれより20数年前に土蔵造を採用したことになり、富山県内の防災、防火建築史上も重要な意義をもっている。

庫裏は本堂よりも大規模な建物で、式台や24畳半の大広間、上の間など10室の整った座敷をもち、玄関や台所そして北端に土蔵が続く。庫裏は明治2年に焼失した後、最初につくられ、本堂ができるまで仮本堂として使われていた。そのために現状のような大規模な建物になったと考えられる。

山門と鐘楼はごく一般的な形式の、小規模な建築であるが、ともに本堂建設以後、明治16年までにつくられたと考えられ、本堂や庫裏とともに明治初～中期に整備された大楽寺の寺観を今に伝える上で大きな役割を果たしている。

◆ 謝辞

大楽寺ご住職田村晴彦氏には、調査に際して多大のご協力を賜った。その上、調査後にも資料の提供などのご援助を得た。ここに深く感謝申し上げる。また、壇家総代の方々には暮れも押し迫った、寒い本堂の中で調査に立ち会っていただいた。記してお礼申し上げます。

そして国の登録文化財の指定を受けた本堂はもちろん、庫裏や山門、鐘楼も含めた大楽寺の歴史的建造物が貴重な文化財として今後も大切に守り伝えられていくことを祈願して謝辞としたい。

(注)

(1) 大楽寺の歴史や沿革については、高岡市立博物館編『特別展 大楽寺の文化財』平成6年および「寶徳院長恩山 大楽寺」などを参照した。

(2) 注1掲載 『特別展 大楽寺の文化財』

(3) 注2と同じ

(4) 注2と同じ

(5) 延宝3年の図の注記

放生津濱の替地之事

當寺贊譽上人延宝元年秋替地願上、翌年替地相對同所山王町二田畠歩数六百四十歩先地之通、依願而被仰付候 (續)

(6) 延宝3年の図の注記

皆 延宝三年三月本堂建立圖也 長恩山大楽寺從中興十五主還譽吟留記之

(7) 寛政11年の図の注記

一、三十五歩七厘 大門惣歩 八、五百拾歩老厘 本堂・庫裏屋敷

一、八歩九厘 長栄寺境 〆五百五十四歩七厘 (續)

(8) 注1掲載の『特別展 大楽寺の文化財』によれば、延宝3年建立の本堂は、高波で破損し、延宝8年に改めて建立されている。したがって、延宝の図と寛政の図の本堂は別の建物とみてよい。

(9) 明治11年の図の注記

公簿面積

實測面積 八百三十八坪九合七勺

内譯

内譯

放生津字紺屋町 一六五ノ一 宅地 六〇六坪

境内地 六百七十六坪九合七勺

一六四 墓地 五畝十二歩

境外地墓地 百六十二坪

計 七百六十八坪

(10) 明治11年の図の境内配置図において、境内地の西北にも「大楽寺境内」とあり、「鐘樓堂」と「経蔵」の建物がみられるが、この2棟は図の左上の総建坪の中にないため、ここでは除外した。

(11) 本堂棟札 (尖頭型 総高193cm、上幅31.5cm 下幅26cm)

(表)

	世話人	大工頭梁	
	額藤井能三	三田淵長田傳右衛門	
	旅家権七	奈良井仁平	
	木林五右衛門	水見間平	明治十一年四月八日釘初
	紺谷藤治郎	旅家吉五郎	八月八日柱立十八日迄
奉修本尊阿弥陀如来	田家権右衛門	長田久左衛門	同十二年一月十五日入佛供養畢
	摺出六三郎	同 傳吉	
	大坪仁平	富山冬忠衛門	壽松院長恩山
	真野徳八郎	伏木三四郎	廿七世太田法譽代
	惣檀那中		

(裏)

明治二己年九月二日夜、山王町_三出火_二當寺灰燼_一相成、其后厨創立而後多分諸道具新出来、現今本堂成就、殊明治第十六年三月十日梵鐘助力_二而新出来、其年二祖聖光上人六百五十回御忌大會_一營畢

願以此功德平等施一切發菩提心往生安樂國 云

(12) 正和勝之助『越中伏木湊と海商百家』桂書房 1995 p546~550

(13) 大楽寺所蔵『明治十一年寅ノ四月ヨリ 本堂寄附方記』

(前略)

一、大松材木三拾六本 伏木 藤井能三

但、該建築ノ際シ持山生木ヲ材造シテ寄付ナリ、割當金ハ別冊ニ記ス

(14) 注13掲載『本堂寄附方記』

(前略)

一、大前卓老箇 木林五郎右衛門

但、腰丸二三階松定紋彫入、職工高瀬震輔、塗師福村弥五郎

一、宮殿鏡板 惣金塗木地共 旅家権七

但、工職棟梁傳右衛門、塗師明德造

(中略)

一、槻六尺紅梁貳枚 木林五郎右衛門

一、榎役柱老本

(後略)

大楽寺（富山県新湊市）の建築

(15) 本堂向拝棟札（総高94cm 幅13.5cm）

（表）

且為師恩信心檀越
當寺再興意趣者上報仏恩也
為現當二世安樂

世話人

紺谷藤治郎
摺治六三郎
真ノ徳八郎
大坪吉右衛門
松田傳右衛門

頭梁大工

三田松田傳右衛門
高瀬竹治郎
和田傳右衛門
田家吉五郎
長田傳吉

壁職

齋藤四良右衛門
中野久平
蔵田佐七
林外治良

（裏）

天下和順風雨以時國豊民安 長恩山壽松院當寺廿七世
（弊） 日月清明□属不起兵才無用 大楽寺向拝忍蓮社法譽得山代
明治廿二年七月新出来賜紫衣

(16) 松田傳右衛門と本堂の長田傳右衛門は、名字が一文字違うだけで、村も同じである。しかも向拝の世話人の中に松田傳右衛門とあることから、長と松を書き間違えたことも考えられる。

(17) 文化庁監修『重要文化財12 建造物Ⅰ 社寺(仏堂 厨子)』毎日新聞社 昭和48年
知恩院勢至堂 (N0115)の項参照。

(18) 文化庁建造物課後藤治氏のご教示による。

(19) 大楽寺の現住職田村晴彦氏のご教示による。

(20) 注11掲載の本堂棟札（裏）参照

(21) 注20と同じ

(22) 注20と同じ

(23) 初田亨・中森勉「富山県における明治期の火災予防と建築制限」日本建築学会計画系論文報告集第379号 昭和62年9月

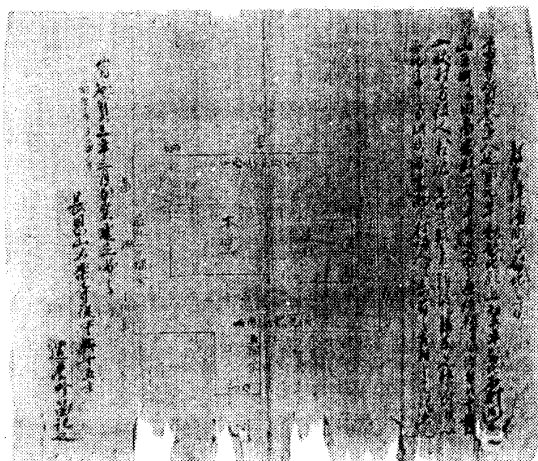


図-1 延宝3年（1675）の図

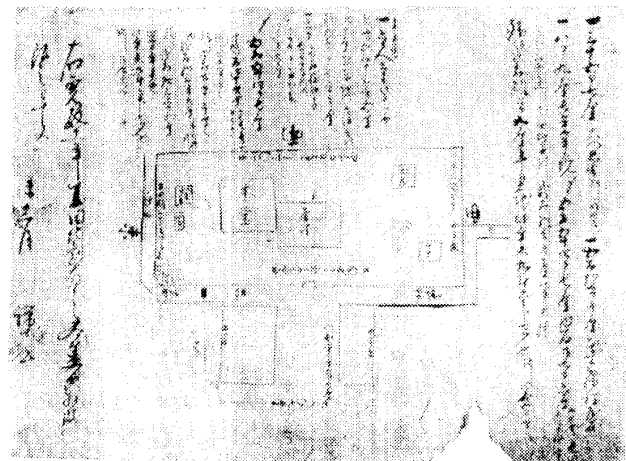


図-2 寛政11年（1799）の図

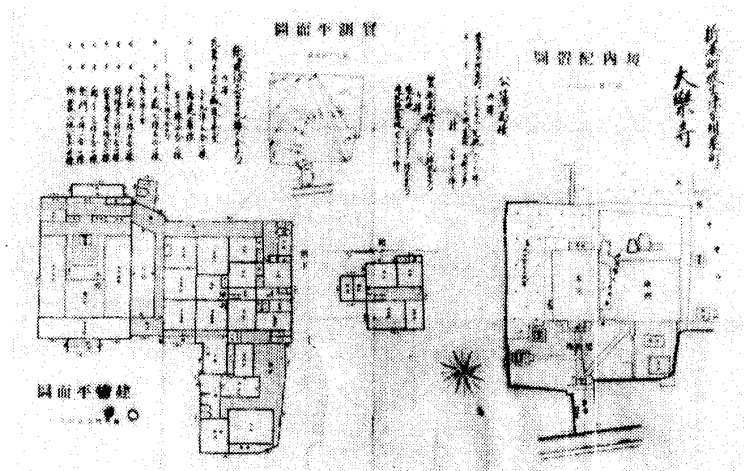


図-3 明治11年（1879）の図

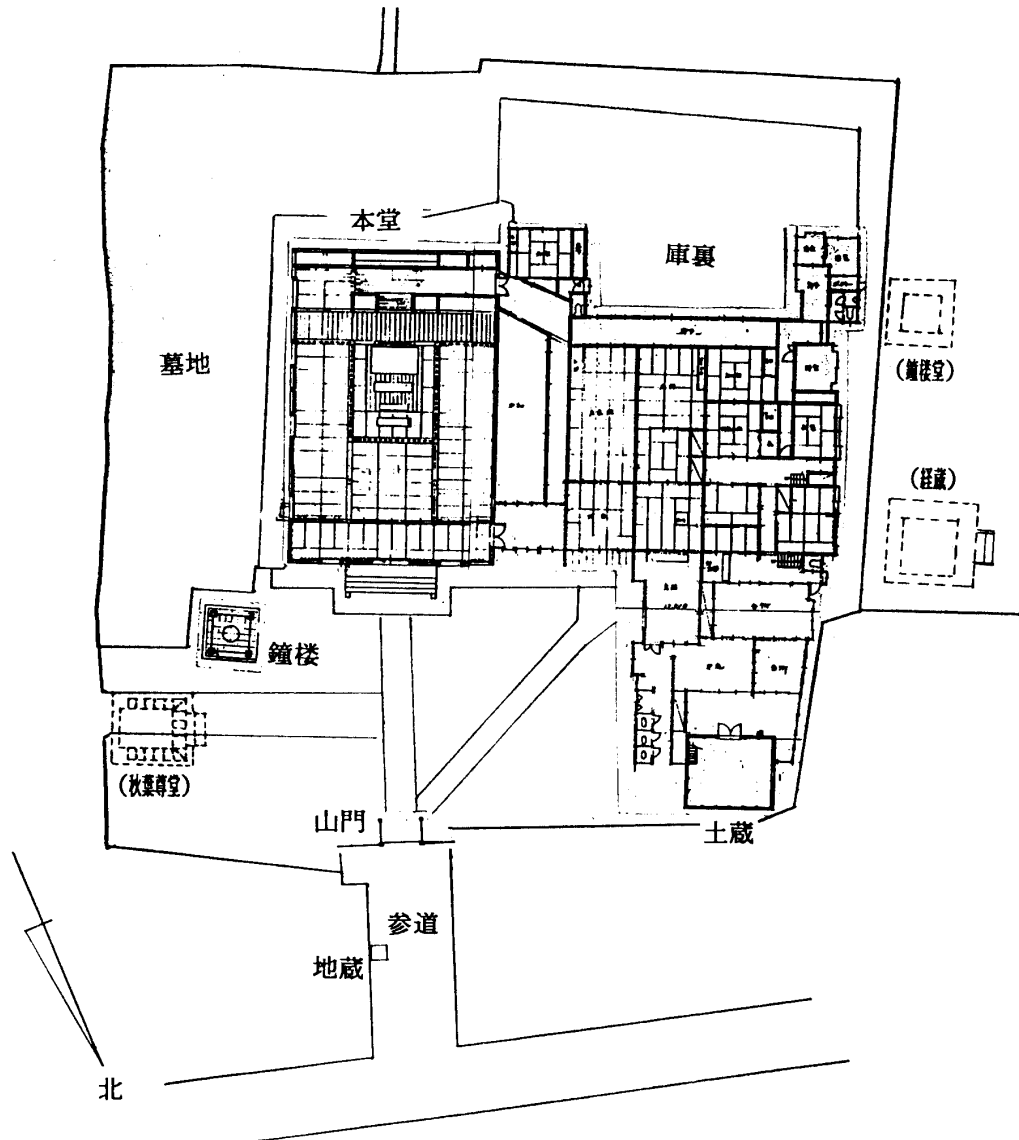


図-4 大楽寺の境内図および本堂・庫裏平面図

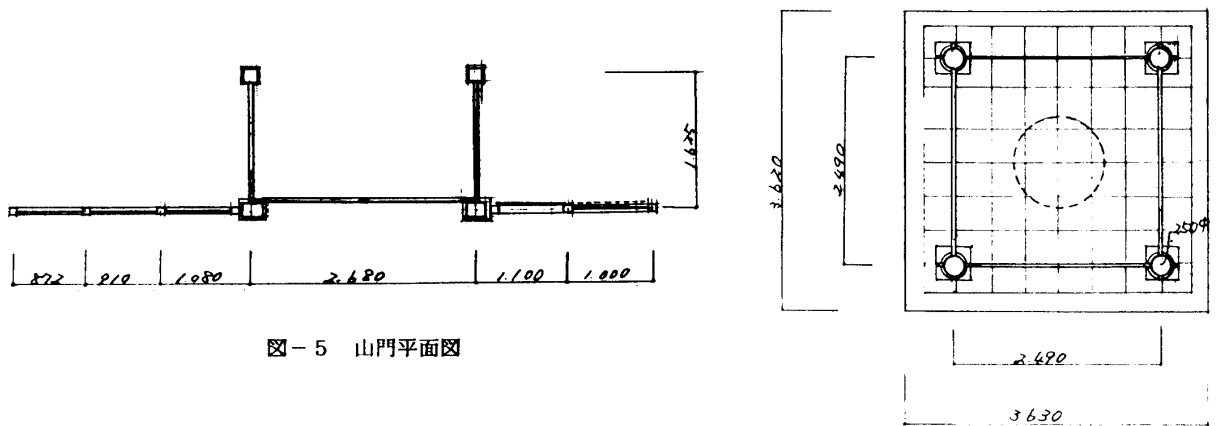


図-5 山門平面図

図-6 鐘楼平面図

大楽寺（富山県新湊市）の建築



写真-1 本堂・庫裏外観



写真-2 本堂向拝の木鼻

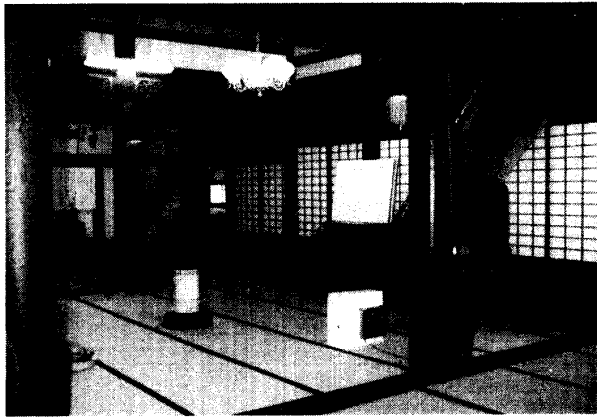


写真-3 本堂内部（外陣）



写真-4 庫裏内部（大広間）



写真-5 山門外観



写真-6 鐘楼外観



(表) (裏)
写真-7 本堂棟札



(表) (裏)
写真-8 向拝棟札

(平成9年12月2日受理)